



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 懷德堂沿革                                                                               |
| Author(s)    |                                                                                     |
| Citation     |                                                                                     |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/90233">https://hdl.handle.net/11094/90233</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德堂沿革

# 懷德堂沿革

## (一) 沿革

### 一 舊懷德堂略史

(西村時彦懷德堂考抄錄)

大阪は古來商業の都會なれども、學問の開けしも亦久しく、町人文學の盛なる海内其比を見ず。和漢學は言ふも更なり、院本、小説、俳諧、狂歌に至るまで其門頗る多く、各特色ありて、其勢力も亦侮るべからず。今漢文學研究の方面を觀察するに、我が懷德堂を以て經と爲し、混沌社を以て緯と爲し、伊物崎其他の各派其間に襯映すと見るを得べきか。混沌社其他に關しては姑く言はず、懷德堂は實に享保九年に創まり、明治維新の際に一時廢絶し、時に隆替を免れずと雖も、大阪の文教を主持すること實に一百數十年、久しからずとせず。石菴、磬菴に始まりて、竹山、履軒に盛んに、其學派の分布せる其勢力の盛なる昌平齋に繼げり。創學の年月に於て懷德堂より早きもの、長崎に立山書院あり、岡山に閑谷齋あり、幕府に昌平齋あり、肥前に東原庠舎ありと雖も、懷德堂が商業地の大阪に起

り、久しきに亘りて、以て民彝人道を講明せしは尤も誇るべき事實にあらずや。

懷德堂の創始を原ぬるに、其前身に多松堂あり。中井甃菴が三宅石菴へ入門せしより、甃菴同門の三星屋武右衛門、道明寺屋吉左衛門、舟橋屋四郎左衛門等と謀り、釀金して今の安土町二丁目北側に宅を買ひて石菴を住ませ、多松堂と名づけて講堂の處となせり。これ正徳三年の事なるが、數年の後石菴強いて高麗橋三丁目なる芋屋三郎右衛門の隱居屋敷に借宅せるより、享保四年多松堂も賣拂はれしが、此頃より備前屋吉兵衛、鴻池又四郎なども入門し、從游の徒も次第に加はれり。會々大火に遭ひて石菴平野に立退きしより、前記の武右衛門(中村睦峰)吉左衛門(富永芳春)四郎左衛門(長崎克之)吉兵衛(吉田盈枝)又四郎(山中宗古)の所謂る五有志は諸同志と謀つて、災後の地を尼ヶ崎町一丁目(今橋四丁目)北側なる吉左衛門隱宅に卜し、又も此に講舎を建てたり。是れ實に享保九年五月の事にして、表口六間半、奥行二十間なりし、名けて懷德堂といひしは論語里仁第四の君子懷德の語に取れり。十一月石菴の平野より歸りて此に住し、以て子弟に教授せむことを請へり。

時の將軍は八代吉宗公なりしが、嘗て近臣に向つて、京大阪にも學問所様の處拵へ置き、忠孝の筋説き聞せたきもの、誰か願出づる者あるまじきやとの物語ありしを、大島近江守城中より歸宅して父の古心に物語り、古心は入魂の三輪執齋に心當はなきやと問ひしが、大阪には三宅石菴あり、人其德に服すれど左様の儀願出づべきや心元なしとて、右の趣を執齋より豫て相識の門人甃菴に文通せり。

髷報を得て諸同志と謀りしに、若し官許を得ば、只今建立の懷德堂も長く退轉の憂なく、老師石菴の遺跡も永遠に傳はるべく、本望の至と衆議一決しけるが、今之を老師に告げなば恐らくは許可なからん、暫く之を祕すべしと爲し、髷専ら事に當りて江戸大阪の間を奔走し、其筋の注意もありて遂に願書は大阪にて差出すこととなりしが、やがて町奉行より髷へ、願意聞届けられ、學校地は諸役を免ぜらるゝをもて、學問所を取立て、長く退轉せざる様に勤めよと申渡されしは十一年七月にて幕府の官學昌平校の創立元祿三年を去る三十七年後なり。斯くて更に當時の懷德堂の東隣なる尼崎屋の持地表口五間、裏行二十間を申立て、此も許され、直に普請に取掛り同年八月には落成せり。此に至りて校堂の外に左右寮舎ありて、規模頗る大なり。普請の費用は五同志以下の義金による。然れば懷德堂は最初よりして敷地は恩賜、維持は義金といふ一種公立の性質なりけり。衆石菴を推して學主となし、髷を推して學問所預人とせり。石菴は以前より學校住居なりしが、以後髷も堂内住居となれり。

學問所の普請は八月に成就せしが、石菴始めて論語の講席を開きしは十月五日なりき。五井蘭洲聘せられて助教となり日講を主れり、並河誠所、井上赤水も一時講を助けたりしが、誠所は享保十二年の四月を以て東に歸り、尋いで蘭洲も亦東游の途に上れり。然れば石菴も享保十二年の夏頃より日講を手傳ひけるが、十三年の春に止みたれば、井上赤水一人となりしより、隔日の講となし、從來主と

して學校の事務を管理せし麓菴も専ら講説に従事しけり。三輪執齋は石菴の親友にして懷德堂創立の張本なり。然れば京都より大阪に來りし時には臨時の講あり。石菴没後、伊藤東涯をも招請して講筵を開けりといふ。

石菴が享保十一年十月、懷德堂の玄關に懸けし壁書三ヶ條は平民的教育に重きを置けると、大阪町人の事情を參酌せる點とに於て用意せられたるが、其文に

定

一、學問は志孝を盡し職業を勤むる等之上に有之事にて候、講釋も唯右之趣を説すゝむる義に候へば書物不<sub>レ</sub>持人も聽聞くるしかるまじく候事

但不<sub>レ</sub>叶用事出來候はゞ、講釋半にも退出可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候

一、武家方は可<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>上座<sub>一</sub>事

但講釋始り候後出席候はゞ、其差別有之まじく候

一、始て出席之方は、中井忠藏(麓菴をいふ)迄其斷可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候事

但し忠藏他行之節者、支配人道明寺屋新助迄案内可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候

以 上

午十月

學問所行司

とあり。而して創學當初の教科に關しては懷德堂内事記には、

一、日講の書は、四書、書經、詩經、春秋胡傳、小學、近思錄

一、毎月望、同志會合、老先生象山集要之講、右者毎年正月十五日初會にて、同志中燕集、老先生初講有之、後有之故毎月之會は十六日に改む、

とあり、これによれば日講の書は皆是れ程朱の學なれども、石菴が正月初講及び毎月の講釋は陸子の學なり。要するに最初の懷德堂は實に朱陸併用なり、外朱内王なり、四書、五經、及び道義の書以外の雜書、或は表面詩文を講ずる事をも定約によりて禁じたりしが如し。

石菴は懷德堂創立後、僅に四五年なる享保十五年七月を以て病歿せり。石菴の歿後、贅菴懷德堂の學主となりて、學問所預人の名義をも兼ねたりき。贅菴は實に懷德堂創立の功臣なり。創學願立の爲に徒步にて江戸に往復すること前後六回、中間江戸にて大患に罹りしも屈せず、遂に其志を達せり。且石菴の高足として學德並に長じたる者贅菴に若くはなし。志尙同じからざる學者を聘せんよりも、贅菴をして石菴の後を承けしめしは情理に於て當然なり。以後中井三宅の二家は其宅を入易へて住めり。初め石菴贅菴並に堂中に住せし比は、皆客分の姿にて、普請造作賄方までも一切五同志にて引受けしが、贅菴の代となりて、世話人大に減じ、萬事舊の如くならざるより、贅菴は殘れる五同志の富永芳春、吉田盈枝、山中宗古の三人と協議し、學校の事一切を贅菴一人にて引受ける事とせり。是に

至りて懷德堂維持の制度は一變せり。

既にして創學二十餘年を閲し、堂舎も頽圯して、支へ難きより、髡菴奮然として新築を思ひ立ち、大工共に向ひて、學校資金の餘裕を待つて工事を興さんには、我等存命覺束なし、先づ普請を成就せしめ、後五年を期限として追々に支拂ばやといひしに、髡菴の人格に服せる事とて、衆工爭ふて役に就き、學校は後世の模範なり、堅固に造作せんこと、我等の面目なり、賃銀は問ふ所に非ずと、手を揃へて夜を日に繼ぎ、僅々十餘人の大工にて、寶曆元年の正月に始り、六月には普請出來し、人皆其神速に驚きしといふ。髡菴時に年六十なり。是に於て堂舎一新して煥然觀を改めたり。而して節省儉約よく工費數百金を期限の如く償へり。此の大土木の成就せしは鴻池又四郎の如き篤志の尠からぬ寄附を爲せるにもよるが、髡菴の堅節と材幹無んば焉ぞかゝるを得ん。髡菴の大阪の文教を裨益せし功德決して忘るべからざるなり。髡菴の徳性を重んじ踐履を尙びしこと此の如し。而して著述は其好む所に非ず、寶曆八年六月歿す。二男あり、長は竹山、次は即ち履軒なり。

髡菴歿後の學主は當代の耆宿なる蘭洲を持すべきこと當然なり。懷德堂創立の初め、講師を求むるに當りて、髡菴は蘭洲にして諾せずんば、書院は無きに等しと、蘭洲よつて諾し、始て講を開きしに非ずや、蘭洲東游十餘年にして歸れば、髡菴病氣勝にて日講も絶々なりしを、蘭洲徐々に學規の振作を説き、髡菴も亦喜んで教授を助けんことを請ひ、再び懷德堂に助教として經を講ずるに至れり。よ



つて蘭洲は住居を歸阪後五年の寛保三年九月に堂中に移せり。されど年已に老い、且表面に立つを好まざりしより、春樓先師の子たるを以て學主となり、竹山預人となれり。世の懷德堂を説く者、重きを石菴、斂菴に置きて蘭洲の功績を知る者蓋し希なり。蘭洲の懷德堂に於ける、常に助教の地位に甘んじて一たびも學主預人ところを爲らざれ、懷德堂の教育に關し、將又大阪文學の根柢を養ひし點に關し、其功績却て石菴、斂菴の上にあり。

蘭洲經を執て徒に授くる事二十年、初め堂規を掲ぐるや、石菴は無縁の人は叨に講席に入るを禁じたりしが、蘭洲西歸の後、尼ヶ崎町の年寄川井立牧より、無縁の人にも聽講せしめられては如何との申込あり。蘭洲の意見にて町内丈は無縁の人にも苦しからざる事に定めたり。此に至りて懷德堂の講義は半公開の姿となれり。次に席順なるが、最初の壁書に武家方は上座たるべき事とありしを、

一、書生の交は貴賤貧富を論ぜず、可爲同輩一事

但し大人小子の辨は可有之候、座席は新舊長幼學術の淺深を以て面々可被致推讓候と改め、階級制度の嚴なりし時代に學問上は貴賤貧富の差別を認めず、士民平等の思想を表白せしは懷德堂の特色を見るべし。第三は寶曆八年八月蘭洲等連署の懷德堂定約附記なり。舊定約には、學主の任は父子相續を許さふに、附記には學主死後、適當の人を求め難くして、其子弟に相應の人あらば、相續苦しからざることに改め、次に舊約には、學主預人（公務）、支配人（町務）を置くこと

なりしも、支配人は無用なるをもて、學主は教導を司り、預人は公務を引受くることゝなし、學主預人を兼ねるを許さずと改め、更に講師助講の事を記して、學徳ある人を招請して講談を依頼すべしと爲し、次の一條あり。

一、四書五經道義の書而已講談いたし、他の雜書講候事一切無用と申義に候へ共、餘力に詩賦文章或は醫師をも心懸候人へ、内證にて講じ聞せ、或は會讀にいたし、或は詩會文會等致候事は格別の義と存候、萬年も内證にて醫書詩集等講じ聞せ候事も有之候、但し表向の講談に致間敷事は定約の通可爲勿論候

舊約には人寄の爲に詩文を講ずるを禁じ、從來の懷徳堂は道學を主とし、これによりて風教を正しくせんと期し、文華の觀るべきものなかりしを、蘭洲に至りて學力の根柢も深く、詩文にも長ぜしより華實並び收めんと此に學規を改めしは、懷徳堂學風の一變と謂ふべく、他日竹山、履軒等の經術文章其盛を致して、海内の欽仰する所となりしは、由來する所ありといふべし。寶曆十二年三月蘭洲歿す時に竹山三十四、履軒三十一、已に鬱として一家を成せる者は實に蘭洲の恩なり。

これより前、寶曆七年八月、春樓大學を開講し、同じく九年蘭洲中風に罹りしより、代つて易傳を講ず。竹山は預人なれば其專職は公務にあれど、學主の春樓病身の爲に臨時に易傳の助講每々なりけるが、寶曆十一年九月以後、二七の朝講は竹山引受け、其後蘭洲も物故せしより、預人を以て教授を

兼ね、近思錄其他の諸書を講じたりといふ。春樓學主たる事二十五年にして天明二年十月歿す。春樓歿後は竹山代りて學主となり、預人を兼ねたり。春樓學主たりし間は、竹山は預人なり、後輩なり、意の如くならず、教授片手に著述に従事して獨り儒法を守りしが、此に至りて學校建立の趣意に返り儒風を振興すべきを述べ、諸同志も其意に従へり。竹山は學問の宗旨を明かにせんが爲に、先づ白鹿洞學規を巨板に新刻し、開講の日、之を講堂の楣上に揭示し、以て程朱の學を標榜せり。此より二七の朝講は尙書、夜講は近思錄、其他、伊洛淵源錄の會談、大學の開講、左傳の會讀を始め、更に詩會をも開き、朔日、十五日の休日の外は、間斷なく學課を督勵せしかば、宿弊一洗して、學風大に振ひ生徒日に進みて盛を一時に鳴らすに至れり。

寛政四年五月、大火の爲に懷德堂も全部類焼し、重立ちたる同志も火災に罹らざるなし。竹山一期の心配は學校の再建なり。享保の前例もあれば公儀普請を願ふの外なく、尙此機會に學校を擴張せんと思ひ、城代堀田侯に内願し、堀田侯の賛同を得て、樂翁公及び松平和泉守、堀田相模守などに出入して學校再興を願出しに、何れも舊交の諸侯なれば願意を聞置かれ、一先づ大阪に歸り、表立ちて町奉行所に願出づべしとの沙汰なり。よつて直に町奉行所に願出で、是の歲は何の事もなく、翌五年三月、學校繪圖面を差出すべしとあり。因て懷德堂元敷地二百三十坪の上に添地を願ひて、聖廟拜殿文庫教授住宅等をも建築すべき繪圖一枚と、聖廟等は取止めて、元敷地の儘に、講堂學寮等をも増建す

べき繪圖一枚との二通を差出したり。されど再三見積の變更を命ぜられ、減額に減額を重ねて三年の哀願に贏ち得し所、僅々三百兩の補助に過ぎず、所詮豫定の校舎再築は出来難きも、寛政七年八月新始、先づ學校より着手し、次に門塲、次に玄關講堂、東西房に及び、追々建立して、翌八年七月竣工費總計七百餘金に及びしに、公金三百兩の外は、同志門人の働きにて滞なく済みたりしは、竹山の學德力量に依れり。蓋し整菴の寶曆度の講舎改築と並んで永く銘記すべき事柄たり。

寛政八年に學校再建成就して、竹山の志成りしと共に、長子蕉園の天才人に絶し、學業大に進みければ、翌九年八月を以て竹山隱退を告げ、蕉園をして家名を相續せしむ。尤も學主は竹山にして、學校預人の名義は之を蕉園に譲れり。されど蕉園は享和三年八月を以て逝き、竹山も亦蕉園病歿の翌年なる享和四年、即ち文化元年二月を以て懷德堂の正寢に終れるより、其遺言により弟履軒和泉町の水哉館に在りしが、月々四九の講席のみは受持ちたりき。此に再び履軒と懷德堂との關係を生じたり。元來履軒も竹山と同じく幼より懷德堂に育ちしも、二男の事として壯事は表面學校の事に携はりしことなく、一時竹山の不在中學校の世話を爲しき。されど履軒は本來水哉館に割據せしより、文化元年竹山逝去に至る迄の三十六七年間は全然懷德堂に關係せざりき。履軒の懷德堂講經は何年迄繼續せしや記録なし。要するに懷德堂は竹山死するも、履軒巋然として猶存せし間は、江戸の昌平疊と對峙して關西唯一の學府の重鎮たりき。

竹山歿後の懷德堂は別に學主を置かずして預人と教授とより成り、教授は履軒なりしが、履軒歿後預人兼教授たりしは竹山の第七子碩果なりき。竹山、履軒の盛時に繼ぎて懷德堂の名聲を赫々たらしめんことは何人も困難を免れず。碩果は此困難なる時代の繼承者となりしより家學を恪守して既成の業を保持するに力め、高く自ら標置して四方俗儒と交游せず、懷德堂の學風斯に至りて又一變せり。

文政八年六月は懷德堂が幕府の官許を得たりし創學壹百年に當りしより、其旨届出ければ、市尹より緒を承くること永久にして先業を墜さざるを賞し、之を將來に傳へて永世渝らざらんことを戒飭せり。碩果は天保十一年三月、病歿せり。是より先き姪の並河寒泉を養うて嗣となし、碩果は教授、寒泉は學校預人となりしが、後寒泉本姓に復せしより、更に從弟柚園の子桐園と號せしを養ふて嗣と爲せしが、碩果歿後、桐園を學校預人と爲し、寒泉は教授となれり。

寒泉、桐園の懷德堂を管理せしは、天保十一年より、明治二年に至る三十年間なり。寒泉の學は一に程朱を尊奉して、多岐に涉らず、門下に諫するに經史兼修を以てし、諸子は喜ばず。實學實行を主として、文華に驚せ德行に疎なるを厭ふ。要するに、碩果以來閉鎖退嬰の方針に出で、寒泉、桐園皆其風を守り、學校の中に割據せしかば、竹山時代の大學は此に名實共に一郷校とは爲れり。然れど儒林の世業を紹介し、學風の醇粹を期して、人をして正學此に在るを知らしめて、以て歸嚮する所あらしめしは、世道人心に裨益せしこと尠からず。而して懷德堂掉尾の事業として、寒泉、桐園の力を盡し

しは、文庫の建築、逸史の上木、聖廟創建の企等なりき。伏見鳥羽の戦ありて、大阪も人心恟々、懷德堂も一時業を休みてありけるが、やがて騷亂も鎮まりしより、以前の如く教授を始めたり。此頃に於ける特筆すべき事柄は明治元年の山階宮晃親王の懷德堂へ台臨あらせられしことなり。

王政維新の後は、學問上にも大影響ありて、新しきを尙び、舊きを厭ふ時代の傾向は、洋學の天下となり、懷德堂も門前の雀羅を奈何ともする能はず、頽勢の支持すべからざるを知り、校門を閉せしは明治二年十二月、一時廢絶の已むなきに至れり。懷德創立の享保九年を距ること一百四十有六年なり。

## 二 新懷德堂沿革略

懷德堂學徒離散して、絃誦の聲を絶つこと四十年にして、復興の氣運は茲に復た開けぬ。而して實に其端を大阪人文會に發せり。人文會は前大阪府立圖書館長今井貫一君の首唱に係り、大阪人文の發達を討査し、闡幽發微、以て文化と風教とに貢獻せんとする在阪好學の士より成りしものなり。

明治四十三年一月、會員西村時彦君、其例會に於て懷德堂教授たりし五井蘭洲の傳を講演せしに、講畢りて後、懷德堂師儒諸先生の爲に公祭を舉行せばやとの議、期せずして衆口より發し、全會一致之を可決せり。是より先き、中井竹山の曾孫中井木菴麻呂君は重野成齋の紹介を以て、大阪市史編纂

員幸田成友君と共に西村君を訪ひて、懷德堂公祭の舉に謀り及べりしが、時未だ到らずして其事中輟せり。此に至りて人文會首唱實行の責に任ずることゝなりしは會員全體の篤志に出づるなり。是れ實に懷德堂復興の濫觴にして、又現在懷德堂記念會創立の發端なり。人文會の議に曰く、懷德堂は幕府の保護と志ある市民の協力とに成りし公立の學問所なり。然れば公祭は大阪人文會の私すべきに非ずして、大阪府教育會は勿論、懷德堂に緣故深き鴻池善右衛門君、住友吉左衛門君を初として、同志の紳士に請うて發起人たらんことを以てすべしと。因りて同年九月、西村時彦君は會の決議を齎らして、歴訪勸説せしに、皆深厚なる同意を表し、此の舉の世道人心に大なる關係あるを贊し、奮て發起の責に任ずべしとの快諾を得たり。斯くて九月二十五日發企人會を開き、其互選に由り、住友吉左衛門君を會頭に小山健三君を副會頭に推し、會則を議定し、會に命くるに懷德堂記念會の名を以てせり。かくて會の成立するや、先づ之を中井家遺族及び舊故に告知し、會の宗旨とする報本反始の義を明かにし、次に新聞紙上にて會の成立を江湖に告白し、又學術講演會を開きて、會の趣旨を普及し、汎く有志の入會を勸誘せしかば、會員を得ること、南は九州、北は北海道に亘り、特別會員六百二十二名、普通會員一千三百七十名の多きに上れり。

明治四十四年十月五日、懷德堂開講記念日を以て、大阪市公會堂を用ひて祭場とし、儒禮に依りて祭典を執行し、六日七日の兩日を以て、東西兩大學の碩學を聘して、記念學術講演會を開き、同月一

日より六日に至るの間、中井家を初め諸家襲藏の懷德堂先賢遺書遺物を展觀し、更に懷德堂師儒の遺著十種（萬年先生論孟首章講義、髫髻先生五孝子傳、富貴村良農事狀、竹山先生蒙養篇、貞婦記錄、蘭洲先生茗話、勢語通、竹山先生箕陰集、國字牘、履軒先生論語逢原）を選擇編纂して、懷德堂遺書と題し記念刊行せり。

明治四十五年二月竹山中井善太先生に従四位を贈らる。同年三月、剩餘金六千餘圓處分協議會を開き、剩餘金を基本資産とし、本會と同一の目的の下に、更に法人組織の懷德堂記念會を創立し、有終の美を濟さんとの議を決し、五月に至り委員の手になれる寄附行爲案の脱稿を見しも、設立者の推薦に幾多の時日を費せし時、恰も明治天皇登遐の事あり。國民考妣を喪せしが如く、荏苒星霜を更む。大正二年六月に至りて協議會を開きて、寄附行爲案を可決し、財團法人懷德堂記念會設立者として、永田仁助君、西村時彦君、今井貫一君、水落庄兵衛君、廣岡惠三君を推し、同月三十日法人設立を出願し、八月二十日許可せらる。因て前記の五君理事となり、永田仁助君を理事長に選舉し、九月一日法人登記を得たり。

大正三年三月五日本會の目的及事業の計畫畏くも天聽に達し、金貳百圓を下賜せらる。十一月履軒中井德二先生に従四位を贈らる。

同四年六月、講堂敷地として府立大阪博物場西北隅なる三百六十一坪の無償使用許可を得、懷德堂



重建の議茲に決し、十月地鎮祭を執行す。十一月東厓伊藤原藏先生に従五位を贈らる。

同五年九月懷德堂竣工す。是れ復興されたる今の懷德堂なり。同月水落庄兵衛君理事を辭し、小倉正恒君之に代る。十二月廣島高等師範學校教授文學士松山直藏君を聘して懷德堂教授とす。是より先き、十月十五日開講式を舉行し、十一月四日京都帝國大學文學部教授を聘し、定期學術講演會第一回を開き、爾來毎月二回開會す。

同六年一月、會計規則、講義規則を定む。理事西村時彦君に講師を囑託す。一月二十七日開講式を舉げ松山教授大學首章を講ず。四月素讀科を設け、波多野七藏君に教師を囑託す、五月より講義を開始す。同月京都帝國大學助教授文學士吉澤義則君に講師を囑託す。十月十四日記念祭恒典を行ふ。同日廣岡惠三君理事を辭し、坂仲輔君之に代る。十一月髯菴中井忠藏先生に正五位を、誠所並河五一郎先生に従五位を贈らる。

同八年二月吉澤義則君講師を辭す。同月第三高等學校教授文學士林森太郎君に講師を囑託す。三月文學士武内義雄君に講師を囑託し、支那に留學せしむ。四月通俗講演規定を定め、六月第一回通俗講演を開く。九月より日曜朝講を開始し、松山教授擔任す。十一月石菴三宅新次郎、蘭洲五井藤九郎、寒泉並河復一三先生に各正五位を贈らる。

同九年二月波多野七藏君教師を辭す、吉田銳雄君を教師とす。十月十日記念祭恒典を行ひ、兼ねて

本堂先師儒諸先生の贈位を報告す。同月教育勅語謄本を下附せらる。十二月武内講師支那より歸る。

同十年一月開講の日を以て、教授教育勅語を捧讀し、爾來毎年の恒式と定む。同月より定日講義を増加し日曜朝講を合せて毎週四回とす。同月文學博士狩野直喜君、同内藤虎次郎君に顧問を囑託す。九月西村時彦君理事を辭し、十月上野精一君之に代る。

同十一年十月八日午前記念祭恒典を行ひ、午後孔子歿後二千四百年記念事業として孔子祭を行ふ。

同十二年三月武内義雄君東北帝國大學教授に任命せらる。四月大阪高等學校教授文學士財津愛象、文學士稻東猛二君に講師を囑託す。同月より毎週一回文科講義を開始す。七月二十七日畏くも本會事業の狀況 天聽に達し、金參千圓を下賜せらる。十一月吉田銳雄君を講師とす。同月文部省在外研究員を命ぜられ、支那に向け出發す。十二月孔子歿後二千四百年記念事業の一たる校印論語義疏成る。

同十三年二月執齋三輪善藏先生に正五位を贈らる。七月三十日宮内省御用掛にして本會の評議員兼講師たる西村時彦君歿す。

同十四年六月、講師吉田銳雄君支那より歸る、助教授とす。同月懷德堂文科學術講演集同百科通俗講演集各第一輯成る。八月五日より十二日に至る一週間、支那學講習會を本堂に開く。八月十四日理事坂仲輔君歿す。九月七日、故西村博士記念會より、同博士舊藏書全部を碩園記念文庫の名を附して保存すべく、本會に寄贈せらる。同月十八日、永田仁助君より漢學獎勵の爲め、獎學資金五萬圓を寄

附せらる。十一月重印懷德堂考成る。

同十五年六月一日懷德堂書庫並研究室起工。七日 久邇宮殿下同妃殿下御同列にて成らせらる。七月懷德堂文庫閱覽規則及び懷德堂記念會奉祀規定を定む。十月三十一日書庫並研究室工を竣る。十一月六日記念祭恒典を執行し、本堂重建後に於ける物故講師西村時彦君外二名、物故功勞者住友吉左衛門君外七名の奉祀をなし、併せて創學二百年、重建十年の記念式典を舉行す。是日 久邇宮家より金壹萬疋を下賜せらる。

昭和二年三月十日理事長永田仁助君歿す。四月二十三日教授文學博士松山直藏君歿す。故を以て同教授擔任の日曜朝講を廢す。十月九日理事小倉正恒君理事長に就任す。同日本間瀨策三君、田中隆三君理事に就任す。十二月十二日講師稻東猛君歿す。

同四年四月一日大阪高等學校教授文學士財津愛象君を聘して教授とす。同日大阪高等學校教授文學博士秋月胤繼君を講師に囑託す。六月四日 今上天皇陛下大阪に行幸、甘露寺侍從を御差遣あらせらる。九月一日大阪高等學校教授文學士佐々木恒清君を講師に囑託す。十月十日野々村政也君理事に就任す。同月十二日記念祭恒典を行ひ、併せて物故教授松山直藏君、講師稻東猛君外四名、竝に物故功勞者永田仁助君を奉祀す。

同五年三月五日理事田中隆三君辭任す。四月二十四日理事野々村政也君歿す。

同六年十月四日教授財津愛象君歿す。十月十日江崎政忠君理事に就任す。

同七年九月十日岡山源六君を講師に囑託す。十二月三十一日講師林森太郎君辭任す。

同八年三月一日文學士大塚末雄君を講師に囑託す。是より定日講義を毎週四回とす。四月十三日第三高等學校教授文學士阪倉篤太郎君を講師に囑託す。九月二十二日中井木菟麻呂君より舊懷堂遺物一部四十七點の寄贈を受く。

同九年三月三十日文科講義を廢す。四月一日文學士武藤長平君を講師に囑託す。是より定日講義を毎週五回とす。但し通俗講演の當日は休講の事とす。四月十四日滿洲國國務總理大臣鄭孝胥君來堂、六月二十六日顧問文學博士内藤虎次郎君歿す。

同十年十二月十九日 東久邇宮殿下成らせらる。

同十一年四月十四日北平清華大學教授劉文典君來堂、十日間碩園文庫の楚辭に付研究す。八月十七日滿洲國前國務總理大臣鄭孝胥君書を小倉理事長に寄せ、金參千圓を本堂基金として寄附せらる。十月一日西村時彦君遺著碩園先生遺集五冊を印行す。同月十日記念祭典竝に重建二十年式典を行ひ、併せて物故教授財津愛象君、顧問内藤虎次郎君、講師佐々木恒清君外六人、竝に物故功勞著鴻池善右衛門君外四人を奉祀す。

同十三年一月二十二日講師武藤長平君歿す。四月より定日講義を毎週四回とす。五月七日講師岡山

源六君歿す。七月二十日より八月五日まで（日曜を除く）十五日間第一回支那語講習會を開く。

同十四年二月一日大江文城君を講師に囑託す。三月十四日中井木菟麻呂君より舊懷德堂及水哉館の遺書遺品三百十五點の寄贈を受く。七月一日より八月五日まで毎週火、木、土曜の十五日間第二回支那語講習會を開く。七月八日伊藤介夫氏遺族より履軒先生手書後漢書雕題外五十餘點の寄贈を受く。

十一月一日定日講義は十一月より三月までは午後六時半より同八時半まで、四月より十月までは午後七時より同九時まで、土曜及通俗講演は、十一月より三月までは午後六時半より八時まで、四月より十月までは、午後七時より同八時半までと變更す。

同十五年一月十二日懷德堂印存成る。三月十八日理事今井貫一君歿す。七月二日より八月三日まで毎週火、木、土曜の十五日間第三回支那語講習會を開く。十月十二日古田俊之助君理事に就任す。十一月十九日皇紀二千六百年奉祝式を大講堂に舉行す。

同十六年一月十四日關西學院教授張源祥君を講師に囑託し、定日講義中に支那語科を加ふ、是より定日講義を毎週五回とす。十月十一日記念祭典竝に重建二十五年式典を行ひ、併せて物故講師林森太郎君外四名、物故功勞者藤田平太郎君、今井貫一君を奉祀す。

同十七年九月重建二十五年記念事業たる中井竹山先生著草茅危言五冊を印行す。